

今、私たちを取り巻く環境異変と経営者の役割

初谷 博 (はつや ひろし/株式会社吉岡)

この度は第2回経営者環境力大賞をいただきまして誠にありがとうございました。

環境力大賞をいただいた後から、世間では数々の問題が提起されました。環境保全と経済活動の両立がいかに難しい問題かを経営者に問われているといっても過言ではないでしょう。私がこの間に感じた、幾つかの事例をベースに考察し、経営者としての対応を述べさせていただきます。

地球温暖化と気候変動

今年の夏は誰もが経験しない異常な暑さでした。日本各地840か所で、1898年から測定された6~8月の平均気温が最も高いという記録破りの天候でした。北半球を襲ったこの猛暑は様々な環境への影響を与えました。特に最近のニュースで報道されているクマやイノシシが里山や市街地に現れて人間を襲う事例です。これは夏の異常な暑さで山のクヌギ、ブナが実をつけず、さらにナラ枯れ病も発生しているとのことでした。

恒常的にこのような天候になる可能性があり、日本の各地で起こっている異常気象が地球温暖化の影響であると誰もが認識せざるを得ません。

生物多様性

この地球上で40億年の進化の過程で多様に分化した3000万種の生物のうち、現在は年間4万種が絶滅しているそうです。最近の25年の歳月は恐竜時代の絶滅スピードよりもはるかに速く、人類が招いた環境破壊が大きな原因と言われております。

今年の流行語大賞に選ばれるくらいに登場した言葉に「生物多様性」があり、本誌でも多くの筆者が論評されております。

名古屋市で行われた[COP10(Conference of the Parties)] 締約国会議で「生物の多様性に関する条約」が話し合われました。

その目的は、①地球上の多様な生物を、その環境とともに保全する、②生物資源を持続可能であるように利用する、③遺伝資源の利用から生ずる利益を公正かつ衡平に配分するという内容ですが、特に③の遺伝資源によって得られた利益配分のルールをめぐる先進国と開発途上国の権利主張が対立し、合意に至らない可能性が高いと言われます。

なぜならば、遺伝資源による研究開発は医薬品、化粧品、食品と身近な製品にも活用され、60~70兆円に上る金額と言われております。開発途上国側の要求もコロンブスの大航海時代に遡るという途方もない時間軸で、対象はジャガイモやトマトも含まれるのではないかとされる勢いです。

また、先進国(大手企業)の開発行為に対して、同等の地球保全を求められる時代になり、この制度を利用した環境関連会社の大規模緑化事業(グリーンニューディール)が盛んになってきています。つまり、開発によって破壊された環境と同等の緑化を企業に負担させる法律が施行された場合、その緑化を売買しようという会社が登場してきたわけです。

日本の環境破壊の現状

知床は2005年に世界自然遺産に登録されました。日本では屋久島、白神山地に続く3番目の登録でした。知床は流水が漂着する海岸として北半球で最南端に位置し、海洋生態系と陸上生態系の相互作用により、類稀な生物生産が認められました。私にとって知床は特別な地で、数多く訪れた場所でもあります。最初の訪問は、約40年前に羅臼の先のセセキという所から海岸線を歩き、時には川を渡り、山を越えて知床の灯台まで旅をした経験があります。海岸に流れ込む河川には、カラフトマスが遡上し、それを狙うヒグマの親子も見かけました。暗くなって、先に進めなくなり、コンブ漁の番屋に泊めて頂き、帰路は当時のウトロ港から来た観光船で帰ったという貴重な経験でした。



知床連山を望む知床五湖への高架橋



ブレベの滝への遊歩道付近にいたエゾシカ

今でも、知床には多くのクマが生息しており、知床5湖の遊歩道ではクマと遭遇することもあり、観光中止になることもたびたびです。これは、クマの生息地に人間が侵入しているから当然で、クマにとっては大迷惑なことなのです。

最近、観光重視の知床では、クマとの遭遇を避けるために、1湖までの遊歩道とは別に高架橋を架けるといふ離れ業を行いました（最終的には5湖すべてを高架橋で結ぶらしい）。これにより安心して観光客を誘導できるわけですが、自然界の生態系に与える影響は測り知れません。現に今年の9月に行った際に、夜行性のエゾシカは白昼堂々と遊歩道に現れ、餌をねだる始末で、これはかつて道路脇で車にたかるキタキツネと同じことが行われているわけです。クマに関しても、高架橋を介して人との遭遇が度重なることで、人への恐怖心が薄れ、市街地まで出現する可能性もあります。こうして人為的に行われる環境破壊と温暖化によって引き起こされる環境破壊があります。

私のボランティア活動の拠点である「尾瀬国立公園」では、本土シカの食害で高山植物が絶滅する危険を呈しております。この主な要因は、もともと尾瀬には生息していない本土シカが、温暖化で雪解けが早くなり、日光周辺から尾瀬に入り込み、高山植物を餌にしていることです。昨年の調査では、尾瀬での越冬が確認され、この被害はさらに広範囲に広がる可能性があります。この被害の実態を調査する目的で、私の所属する「尾瀬自然保護ネットワーク」は継続的に尾瀬で観察を続けております。

建材のアスベスト問題の解決

一方、私たちの住生活を取り巻く人為的な環境汚染にアスベスト問題があります。アスベストについては欧米では1990年代に多くの国で全面規制

されましたが、日本では行政の無為無策の結果、対策が遅れ、住宅建材の中で屋根・壁材に使用されてきたレベル3の対象材はなんと2004年まで使われ続けられました。そのため、日本の屋根の18億平方メートルに及ぶ面積になっていると推定されています。これらの建材は時間が経つと劣化し、アスベスト飛散の恐れもあります。屋根を壊す場合にも、飛散防止対策が必要になり、処分場も特定されております。

このような屋根のリフォーム用の屋根材として、私どもが製造している「ウッドピース」という金属屋根は軽くて施工性がよいため、既存の屋根材に加工を加えず、そのまま載せられるメリットがあります。

屋根材から地球温暖化防止の提案

屋根材に求められる性能は各種ありますが、「ウッドピース」の耐久性はもとより、価格・施工性は大手のハウスメーカーで長くお取り扱いいただいている実績が証明しております。

さらに、屋根材に使用する塗装に工夫をして、太陽光の波長の中、温度を上げる領域（赤外線領域）を積極的に反射する「高反射率塗装」を施した製品を発売しました。住い手の住環境の改善はもとより、エアコンの負荷軽減、さらには室内に太陽エネルギーを取り込まないといったエコロジーな屋根材です。この商品は「クールルーフ」と呼ばれ、首都圏のヒートアイランドエリアの自治体から補助金の助成もあります。

これからは、屋根で受ける太陽光を電気に変える「太陽光発電」が屋根の主流になるでしょう。しかしながら、政府が期待している施工実績に届かない最大の理由は、戸建て新築着工率の低迷にあります。そこで、リフォーム屋根をターゲットにした金属屋根材一体型太陽光パネルの製品化が、マーケットから熱望されております。

私はこの商品こそ、CO2削減の大きな切り札になると確信しており、開発に邁進しているところであります。これからも、「たゆみなく屋根を創造する会社」として市場の支持を得て行きたいと思っております。

このような報告の機会を設けて頂きました環境文明21の皆様に感謝申し上げます。

株式会社 URL : <http://woodpiece.co.jp>
NPO 尾瀬自然保護ネットワーク :
http://www.geocities.jp/oze_net/